

蒙古字韻の補修について

吉池孝一

本文通過分析流傳至今的手抄本『蒙古字韻』(倫敦抄本)卷首的「校正字樣」得到以下結論。元朝末年，無名氏以「浙東本蒙古字韻」補「朱宗文校訂蒙古字韻」的缺損部分而發行了「補修本蒙古字韻」。該「補修本」就是手抄本『蒙古字韻』的藍本。

1. はじめに

蒙古字韻はパスパ文字で示された漢字音の下に同音の漢字を収めた韻書風の元代の書物である。刊本は既に無く、朱宗文の序を持つ写本のみがロンドンの大英図書館に伝わる。これをロンドン写本(倫敦写本)と呼ぶ。

上巻										下巻				
①	②	③	④	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩		⑩		⑤		
表題上	劉更序	朱宗文序	校正字樣	總括變化之圖	字母	篆字母	總目	本文		表題下	本文	欠	廻避字樣欠	廻避字樣

本稿は、このロンドン写本が、朱宗文による校訂増補がなされた「朱宗文本」の部分と、朱宗文による校訂と増補が為されていない「浙東本」の部分より成っていることを結論として述べる。結論に至る論旨は次の通りである。

1. 現存するロンドン写本には「校正字樣」の通りに校訂されていない部分がある。
2. 校訂されていない部分は「浙東本」の誤である。
3. 「浙東本」の誤を含む前後には他と異なる特徴がある。その特徴の一つは、朱宗文による被注字が無いということである。

以上の3点に拠って、「浙東本」の誤を含み増字増注が無い部分は「浙東本」であると結論する。そうであるならば、欠落が生じた「朱宗文本」を「浙東本」で補修したものが「ロンドン写本」の藍本ということになる。これを「補修本」と呼ぶことにする。以下において、この結論を「校正字樣」の検討を

通して確認する。

3.校正字様による校訂

蒙古字韻には幾つか異なる版があったらしく、朱宗文はそれらを付き合わせ、『古今韻会挙用』と『増修校正押韻釈疑』に拠って校訂した(吉池孝一 2008)。その校訂の内容により4種の項目に纏め、巻首に「校正字様」と題して収めた。先ず、各本を通じた誤りの訂正(「各本通誤字」)、次いで各本に重複し誤って収められた字の削除(「各本重入漢字」)、更に湖北本と呼ばれる一本の誤りの訂正(「湖北本誤」)、浙東本と呼ばれる一本の誤りの訂正(「浙東本誤」)とある。なお、「校正字様」には誤写や欠落が極めて多い。それを正したものを*を付し各項目の下に提示する。ここでのパスパ文字のローマ字翻字は脚注の方式による¹。

これより「校正字様」の通りに本文が校訂されているか否かを確認し、校訂されているものは○、されていないものは×とする。

■各本通誤字

①順を čeun とするのは誤りであり、正しくは禪母に従う śleun。

čeun 有「順」 (下四 b) ×

śleun 無「順」 (下四 b) ×

②藕を・hiv とするのは誤りであり、正しくは疑母に従う phiv。

・hiv 無「藕」 (下二十 b) ○

phiv 有「藕」 (下十九 b) ○

③俸を p'hiŋ とするのは誤りであり、正しくは幫母に従う bhiŋ。

p'hiŋ 無「俸」 (上十三 a) ○

bhiŋ 有「俸」 (上十三 a) ○

④朋を p'hiŋ とするのは誤りであり、正しくは並母に従う phiŋ。

p'hiŋ 無「朋」 (上十三 a) ○

¹ ローマ字右の漢字は伝統的な36字母。〈子音〉 ㄅ g 見 ㄆ k' 溪 ㄑ k 群 ㄒ 疑 ㄓ d 端 ㄔ t' 透 ㄒ t 定 ㄌ n 泥 ㄍ l 来 ㄅ b 幫 ㄆ p' 滂 ㄆ p 並 ㄇ m 明 ㄈ f (ㄈ f1 奉 ㄈ f2 非敷。f1, f2 の区別がない場合は f とする。1 は旧濁音、2 は清音。以下数字を用いるものは同様)、ㄎ v 微 ㄍ j 照知 ㄆ c' 穿徹 ㄆ c 床澄 ㄌ ṅ 娘 ㄍ ś (ㄍ ś1 禪 ㄍ ś2 審) ㄍ ž 日 ㄍ j 精 ㄍ c' 清 ㄍ c 從 ㄌ s 心 ㄍ z 邪 ㄌ 影 ㄌ h (ㄌ h1 匣 ㄌ h2 曉) ㄍ γ 匣(合)、ㄍ y (ㄍ y1 喻 ㄍ y2 ㄨ(影)) ㄍ ' 魚(喻) ㄍ r ㄍ q 〈半母音〉 ㄍ ü ㄍ i 〈母音〉 ㄍ u ㄌ i ㄌ é ㄍ e ㄌ o とし、母音 a は補写する。

phiŋ 有「𦉳」 (上十三 a) ○

⑤ 𦉳を mèn とするのは誤りであり、正しくは幫母に従う ben。

*誤「𦉳」 → 正「𦉳」²

mèn 無「𦉳」 (下九 b) ○

ben 有「𦉳」 (下十 b) ○

⑥ 痒を zeŋ とするのは誤りであり、正しくは喻母に従う ylaŋ。

zeŋ 無「痒」 (上十六 b) ○

ylaŋ 有「痒」 (上十五 b) ○

■各本重入漢字

⑦ 「パスパ文字欠落 遑遑踔妮𦉳擗」 と 「č'üav 遑遑踔妮𦉳擗」
のうち、前者を削除。

*前者の欠落パスパ文字は「č'av」であり⑦は次の通りとなる³。

「č'av 遑遑踔妮𦉳擗」 と 「č'üav 遑遑踔妮𦉳擗」のうち、前者
を削除。

č'av 無「遑遑踔妮𦉳擗」(下十三 a) ○

č'üav 有「遑遑踔妮𦉳擗」(下十六 b) ○

⑧ 「c'e 截截」 と 「cé 截截」のうち、前者を削除。

*前者の「c'e」は誤りであり正しくは「ce」⁴。したがって、⑧は次

² 𦉳は本文中にない。「ロンドン写本」の所収字の主な部分の供給源が『新刊韻略』であることは寧忌浮 1992 により明らかにされているわけであるが、その『新刊韻略』にもこの字はない。この𦉳は𦉳の誤写であろう。『新刊韻略』をみると、mèn に当たる上声の部分は「○緬彌亮切 沔 湏 𦉳 𦉳(衣急 方緬切) ○雋・・・・」とある。𦉳は、○緬のグループに属しているように見えるが、方緬切とあるから ben に当たる小韻代表字である。「原本蒙古字韻」の編者が、𦉳を誤って○緬沔湏𦉳ととも書き取ってしまったと考える。その誤を朱宗文が校訂したのである。

³ 『古今韻会举要』の入声「三覺」の中の諸字は「覺字母韻」と「各字母韻」と「郭字母韻」の3つに分けられる。これをロンドン写本と対応させると、「覺字母韻」の諸字はパスパ文字の ev~Iav に対応し、「各字母韻」は av に対応し、「郭字母韻」は üav に対応する。『古今韻会举要』の本文によると遑と妮は「各字母韻」(av)に属している。もっとも、その注によると「蒙古韻」では「郭字母韻」(üav)に属すとあるから、遑と妮には2つの韻母が認められるわけである。欠落したパスパ文字は「各字母韻」即ち「č'av」である。

⁴ 截は截とも作りその反切は昨結切であるから声母は従母で、パスパ文字は「c」である。この字は『古今韻会举要』の入声「九屑與薛通」にある。この「九屑與薛通」の中の諸字をみると3つの字母韻からなる。即ち「結字母韻」と「訃字母韻」と「玦字母韻」。この3つをロンドン写本と対応させると、「結字母韻」はパスパ文字の e に対応し、「玦字母韻」は üe に対応する。そして「訃字母韻」は é に対応する。截(截の別体)は『古今韻会举

の通りとなる。

「ce 截截」と「cè 截截」のうち、前者を削除。

【ce】 無「截截」(下二十八 a の c'e と se の間) ○

【cè】 不明 (下三十 b 以降の欠落部) 判断不能

■湖北本誤

⑨驃を bèv とするのは誤りであり、正しくは並母に従う pèv。

bèv 無「驃」(下十五 a) ○

pèv 有「驃」(下十五 a) ○

⑩汝を ñeu とするのは誤りであり、正しくは日母に従う žeu。

ñeu 無「汝」(上二十九 b) ○

žeu 有「汝」(上三十一 a) ○

⑪輶を hlem とするのは誤りであり、正しくは溪母に従う k'am。

*誤「輶」→ 正「輶」⁵ 誤「hlem」→ 正「hlīam」⁶

hlīam 無「輶」(下二十三 b) ○

k'am 無「輶」(下二十 b) ×

■浙東本誤

⑫炎を ylēm とするのは誤りであり、正しくは疑母に従う ŋēm。

ylēm 有「炎」(下二十三 a) ×

ŋēm 無「炎」(下二十二 a) ×

⑬刻を k'iy とするのは誤りであり、正しくは k'hiy。

k'iy 無「刻」(下一 a～下一 b の間) ○

k'hiy 有「刻」(下一 a) ○

⑭蛇を slé とするのは誤りであり、正しくは澄母に従う čé。

【slé】 不明 (下三十 b 以降の欠落部) 判断不能

【čé】 不明 (下三十 b 以降の欠落部) 判断不能

要』では「評字母韻」(ə)の字であるが、注の「蒙古韻」は「結字母韻」(e)とする。截(截の別体)には2つの韻母が認められるわけである。一方が「ce」であり他の一方が「cè」である。

⁵ 当該箇所には輶という字はない。照那斯圖・楊耐思 1987 は輶を『古今韻會舉要』の小韻「坎」に含まれる「輶」の誤写とする。従うべきであろう。

⁶ hlem という音節はロンドン写本にない。ロンドン写本ではしばしば i は e に誤写されることより、ここでも i が e に誤写されたと見做し hlem を hlīam とする。

朱宗文本には2つの特徴がある。1つめは朱宗文によって付された「校正字様」の通りに本文が校訂されていることであり、2つめは義注が付された字即ち被注字が有るということである。

上で1つめに就き検討した。「各本通誤字」は各本に共通した誤であるから、これは「原本蒙古字韻」に有った特徴である。そのうち、①「順」は朱宗文の校訂通りに直っておらず、旧のままである。また、「浙東本誤」は浙東地方に流布した異本にのみ見られる特徴を正したものであるが、そのうち②「炎」は朱宗文の校訂通りに直っておらず、「浙東本」のままである。各本に共通した①「順」の誤は「浙東本」の誤とも言えるから、①と②は共に「浙東本」の誤と言っても良い。そうであるならば、この部分は朱宗文本ではないという疑いが生ずる。

もっとも、被注字が有る部分は朱宗文本であるから、「浙東本」の誤を含む葉に被注字が有るか否かということが問題となる。このことにつき次に検討する。

4. 校訂と被注字

被注字は全ての葉に満遍なく付されているわけではない。いま108の被注字が15の韻部が如何に分布しているかをみると次の通り。一東(10)、二庚(6)、三陽(13)、四支(11)、五魚(10)、六佳(0)、七真(8)、八寒(5)、九先(13)、十蕭(25)、十一尤(6)、十二覃(1)、十三侵(0)、十四歌(0)、十五麻(0)となっている。十二覃の初頭下二十一aに1つあるけれども、下二十一b以降の9葉分の中に被注字はひとつも無い。いかにもバランスの悪い分布となっており、異本を合体したのではないかと思わせる。

そこで、「校正字様」の14の項目を葉数順に並べ、校訂されているものは○、未校訂のものを×とし、右に被注字の有無を記すと次のようになる。

③p'hiŋ	無「𠵼」(上十三a) ○
③bhiŋ	有「𠵼」(上十三a) ○
④p'hiŋ	無「𠵼」(上十三a) ○
④phiŋ	有「𠵼」(上十三a) ○
⑥y1aŋ	有「𠵼」(上十五b) ○
⑥zeŋ	無「𠵼」(上十六b) ○
⑩ñeu	無「汝」(上二十九b) ○

⑩zeu	有「汝」(上三十一 a) ○	
⑬k'hiy	有「刻」(下一 a) ○	
⑬k'iy	無「刻」(下一 a~下一 bの間) ○	
①čeun	有「順」(下四 b) ×	下四 a より下五 b
①šleun	無「順」(下四 b) ×	まで 被注字無し
⑤mén	無「編」(下九 b) ○	
⑤ben	有「編」(下十 b) ○	
⑦č'av	無「遠遄踔妮齷擗籜」(下十三 a) ○	
⑨bév	無「驃」(下十五 a) ○	
⑨pév	有「驃」(下十五 a) ○	
⑦č'üav	有「遠遄踔妮齷擗籜」(下十六 b) ○	
②ḡhiv	有「藕」(下十九 b) ○	
②・hiv	無「藕」(下二十 b) ○	
⑪k'am	無「輜」(下二十 b) ×	下二十 a, b 被注字無し

⑫ḡém	無「炎」(下二十二 a) ×	
⑫ylém	有「炎」(下二十三 a) ×	下二十一 b 以降
⑪hlīa	無「輜」(下二十三 b) ○	被注字無し
⑧【ce】	無「截截」(下二十八 a の c'e と se の間) ○	
⑭【šlě】	「蛇」有無不明(下三十 b 以降の欠落部) 判断不能	
⑭【čě】	「蛇」有無不明(下三十 b 以降の欠落部) 判断不能	
⑧【cé】	「截截」有無不明(下三十 b 以降の欠落部) 判断不能	

下二十一葉 a 以前で、未校訂として×が付されている①と⑪を含む葉に被注字はない。下二十一葉 b 以降には被注字はひとつも無く、そこに⑫が未校訂のまま含まれる。これは先に述べたように「浙東本」の誤である。したがって、被注字の無い下四 a~下五 b と下二十一葉 b 以降を全て「浙東本」としたいところであるが、下二十一葉 b 以降には校訂済みの⑪と⑧があり浙東本説にとってやや具合が悪い。

ただし、⑪は「湖北本」のみの誤に関わるものであり、しかも「輜」は「原本蒙古字韻」の所収字の主な供給源となった『新刊韻略』に無い字であるから、「浙東本」には最初から「輜」は無かった可能性がある。そうであるなら

ば、この部分も「浙東本」と見てもそれほど無理はない。

一方⑧は「浙東本」説にとって都合が悪い。これは「各本重入漢字」であるから、「湖北本」「浙東本」「その他」など各本において共通に重複した漢字があり、重複の一方を削るというものである。削除の結果として、パスパ文字「ce」の下に漢字「截截」が無いことが期待される。ここでは「ce」と「截截」の両者がそっくり無いことから、校訂の結果、音節そのものが削除されたと考えられる。もっとも、各本のうち「浙東本」のみ最初から重複は無かったと見ることも不可能ではない。不可能ではないが、ここでは「下二十一葉 b 以降の全てが浙東本である」ということではなく「下二十一葉 b 以降の大半が浙東本である」としておく。

さて、このような目で「ロンドン写本」を再度見直すと、下二十一葉 b 以降にはやや特異な部分のあることに気づく。下二十三葉の b 面には gīam, k'īam, h2īam, h1īam という音節があるが、この ī の字形が興味深い。ロンドン写本では ī であるべきところ e 「ㄨ」で記されるのが普通であり、ī の本来の字形 「ㄨ」は上に挙げた下二十三葉 b 面の 4 種にしか現れない。この点につき以前より、おかしなこともあるものだと思っていたが、浙東本の一部に ī が e と紛れることなく書かれた部分があってそれが反映したものと考えたと説明がつく。

5. おわりに

以上にに基づき、「原本蒙古字韻」から「ロンドン写本」までの過程を記すと次の通りである。即ち、至大元年（1308 年）よりそれほど遠くない頃、朱宗文による校訂増補がなされた「朱宗文本」が発刊された。この書はパスパ文字漢語文の作成やパスパ文字モンゴル語中の漢語語彙の表記に使用されたが、五十年程たった元末の頃には稀観書となっていた。当時、或る無名氏がその稀観書を入手したのだが、あちらこちらに欠落があった（ロンドン写本で言えば下二十一葉 a 以前の数箇所と下二十一葉 b 以降の大部分の欠落）。欠落はあったけれども、無名氏はその書の価値を認め、欠落した部分を手持ちの「浙東本」を用いて補って「補修本」（一卷）を作り刊行した。補修用に使用された「浙東本」は朱宗文による校訂増補を経っていないものであるから、当然のことながら「補修本」（一卷）の補修部分には朱宗文による校訂増補は無い。更に時代も下り、清朝の乾隆年間に至ると、四庫全書の編纂が始まり書籍の収集も大規模に行われた。この元刻たる「補修本」（一卷）もその候補にのぼ

ったが、首尾の二箇所に欠落が生じており既に完本ではなかった。その首部の欠落は、恐らく「校正字様」の一部と、それに「廻避字様」の前半の半葉である。尾部の欠落は本文「十五麻」の末尾であった。そこで、この首尾に欠落のある「補修本」(一卷)を書写し、上下二巻に分け、欠落のある「廻避字様」を下巻末尾の欠落の後に移し、欠落部分を一箇所にまとめた。このようにして体裁を整えて「四庫採進本」として提出したのである。その採進本の体裁は「四庫提要」に書かれているとおりであり、現存の「ロンドン写本」(二巻)の体裁と一致する。現存する「ロンドン写本」(二巻)は「四庫採進本」の系統に属す写本なのである。

最後に、参考までに、ロンドン写本の藍本となった「補修本」(一卷)と「ロンドン写本」(二巻)の体裁を並べ示すと次の通りである。

■補修本一卷 (ロンドン写本の藍本)

① ② ③ ④ ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩													
表題	劉更序	朱宗文序	校正字様	廻避字様 欠	廻避字様	総括変化之図	字母	篆字母	総目	本文	浙東本 注無し	欠

■ロンドン写本二巻

① ② ③ ④ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩										⑩				⑤		
表題 上	劉更序	朱宗文序	校正字様	総括変化之図	字母	篆字母	総目	本文				浙東本 注無し	欠	廻避字様 欠	廻避字様
										表題 下	本文					

参考文献(発行年順)

- 羅常培・蔡美彪 1959. 『八思巴字與元代漢語〔資料彙編〕』北京：科学出版社。
尾崎雄二郎 1962. 「大英博物館本蒙古字韻札記」, 『人文』第8集, 162-180頁。
鄭再發 1965. 『蒙古字韻跟跟八思巴字有關的韻書』台北：国立台湾大学文学院。
俞昌均 1973. 『較定蒙古韻略』台北：成文出版社。

- 照那斯圖・楊耐思 1987. 『蒙古字韻校本』北京：民族出版社。
- 寧忌浮 1992. 「《蒙古字韻》校勘補遺」, 『內蒙古大學學報(哲學社會科學版)』1992 年第 3 期, 9-16 頁。
- 吉池孝一 1993a. 「『蒙古字韻』の増補部分について」, 『語学研究』(拓殖大學語学研究所) 第 72 号, 17-31 頁。
- 吉池孝一 1993b. 「『蒙古字韻』の元刊本と乾隆写本」, 『中国語学』(日本中国語学会) 第 240 号, 31-40 頁。
- 中村雅之主編 1994. 『パスパ字漢語資料集覽』富山大學人文学部中国語学研究室内パスパ字研究会發行。
- 遠藤光暁 1994. 「『四声通解』の所拠資料と編纂過程」, 『論集』(青山学院大學) 第 35 号, 117-126 頁。
- 寧忌浮 1997. 『古今韻會舉要及相關韻書』北京：中華書局。
- 中村雅之 2003. 「四声通解に引く蒙古韻略について」, 『KOTONOHA』第 9 号, 1-4 頁。
- 吉池孝一 2008. 「蒙古字韻の校訂と増補について」, 『KOTONOHA』第 70 号, 7-16 頁。